

飯舘村スタディーツアーに参加して

国際交流学科3年 HM

2016年6月11日～6月12日の2日間にわたり、震災後私は初めて福島土地に足を踏み入れた。震災前は旅行で訪れることもあったが、原発事故が起きて以来目に見えない放射能の恐怖に怯え、日本列島を北上する勇気はなかった。それ以上に東京にいることすら怖かった。しかし5年が経過した今、大学で環境について勉強していることもあり、自国で何が起きているのか・その現状はどのようなものかを知っておかなければならないと思い今回スタディーツアーへの参加を決意した。

震災当時中学生だった私は、福島第一原子力発電所が津波により倒壊し放射能が漏れているというニュースばかりを目にしていた。そして得られる福島の情報の全てはそこからのみであった。「〇〇ミリ／〇〇マイクロシーベルトを観測しているため注意が必要」と、テレビや紙面上ではひたすら放射能の「数値」ばかりが報道されており、恥ずかしながら私は今回飯舘村や長泥を訪れるまで、何の知識もないままメディアの情報を頼りに安全性を凶ってきていた。実際に自らの足で飯舘村を訪れ、菅野さんや田尾さん、そして溝口先生から様々なお話を伺ったが、震災当時を振り返ると、あの頃からずっと必要だったのは放射能の「数値」ではなく「知識」であったと切に感じた。5年経った今でも至る所に積み上げられている黒いフレコンバッグを実際にこの目で見、人とすれ違えども除染作業中のトラックや作業員である現状を目の当たりにして、起こりうる全てのリスクに対し国が対応していれば村民は分断せずに済んだのかもしれない・美しい飯舘村返して欲しい・福島の未来を保証して欲しい、私自身も様々な思いがこみ上げてきた。

素晴らしい農園の前に大きなフレコンバッグが置かれている現状をどう受け止めるかを唯一村にお住まいになっている大久保さんに失礼ながらお話を伺った。

「フレコンバッグがある現状をどう受け止めますか。また、国や東電に対して怒りはありますか。」

すると大久保さんは鋭い表情で胸の内を明かしてくださった。

「正直、毎日これを見るたびに生きる希望や気力を失う。いつになったら無くなるのか・美しい村が戻ってくるのか。あの当時、飯舘村には多くの人々がいた。国や東電がもっと対処していれば被害は最小限に抑えられたかもしれないし、散々抗議もした。しかし我々の意見は聞き入れられなかった。今でも怒りと不信感は募るけれども、彼らは何もしてくれないのならば自ら動くしかないと感じるようになった。だからこそこうして多くの人々の力を借りて、一つでも多くの花を咲かせることが今の生きる希望であり目標だ。」と。

このお話を伺った時私は、村の復興を応援するのではなく、一緒に再生させていきたいと強く感じた。なぜならそれは決して同情ではなく、この問題は福島や日本レベルでの問題ではないということ、世界全体の教訓として考えていかなければならないものであると私は考えたからである。

私は今後飯舘と多くの人々の架け橋のような存在として、またもっと多くの方々に知っていただけるような広報担当として様々な方法を用いて広めつつ、村の人々と共に村の再生に携わっていきたい。2日間というとても短い期間ではあったものの濃いスタディーツアーであったと感じるとともに、また飯舘村を訪れたいという思いがこみ上げている。今回このツアーに関わってくださったすべての方にお礼を申し上げたい。